



新たな希望を育み、明日へ！



耐えきれないほどの苦しみを抱えて始まる、19歳の祈りの旅

この書籍は2020年下半期芥川賞受賞作家のデビュー作品です。みずみずしい感動をセンター図書コーナーで、どうぞ！



かか

2019年 河出書房新社

宇佐見 りん (著)

[1200-2]

著者プロフィール

- ・ 生年 1999年 (現在大学生)
- ・ 出身地 静岡県
- ・ 受賞歴 『かか』で、
2019年 第56回文藝賞受賞、
2020年 第33回三島由紀夫賞
最年少受賞
2021年 『推し、燃ゆ』で
★第164回芥川賞受賞★

物語の主人公は19歳の浪人生「うーちゃん」。本当の名まえは「うさぎ」です。この名前は「うさぎ年に生まれたから『うさぎ』という名前前でええやん」という、「とと(父)」の一言で名づけられただけのものでした。家には「かか(母)、ババ(祖母)、ジジ(祖父)、明子さん(従妹)、みっくん(弟)、ホロ(犬)」がいます。「とと」は、うーちゃんが小学校に入ってからすぐの頃、浮気が原因で家を出て行きました。

うーちゃんはある日、その日は重大な日であるにもかかわらず、旅に出ます。目的地は熊野那智「西国三十三所巡礼第一番札所青岸渡寺」。目的は「『かか』をにんしんしたい。自分で産み、イチから育ててやりたい」からでした。自宅のある横浜から熊野まで鈍行列車で10時間、新幹線も夜行バスも使わない現代の巡礼の旅が続きます。

出発の朝、「かか」はうーちゃんに持たせるホットケーキを焼こうとしますがうまくいかず、ボールに入れた粉をひっくり返してしまいました。粉まみれになった「かか」の足元には、昨夜の痕跡が残っています。ぐちゃぐちゃになった椅子や新聞紙やビール瓶の破片。毎度のことながら、「かか」は昨日の自分の大暴れを覚えていません。「とと」が家を出た年の夏、「かか」の「亡くなった姉、冬子」の娘である「明子」が、うーちゃん一家と同居するようになりました。明子を溺愛し続ける「ババ」。彼女は、認知機能が衰えて、うーちゃんやみっくんが孫であることを忘れてしまっても、明子は愛する孫であることを忘れていません。家のなかで暗くて悲しい軋みが溜まっていきます。

「かか」は「ババ」にいつも言われていました。「最初に生まれた『冬子』一人ではかわいそうだから、おまえを『おまけ』に産んだ」…。母にも夫にも愛されず、つらい人生を歩んできた「かか」の心は徐々に病んでいきます。やがて、「とと」から受けた暴力を自らの身体に再現して悲しみに浸り、その悲しみの共有を家族に求めて暴れるようになりました。「とと」が「かか」の恋人であったころの話を「ババ」から聞かされるたびに、うーちゃんは自分がどのような過程を経て生まれてきたのかを知ることになります。「性」を介して子宮の内で育まれる命。血でつながっていく親子の関係。「もう、だれかのお嫁さんにも、母にもなりたくはない」と思うようになったうーちゃんの心を慰めてくれるのは、「SNS」でつながる世界だけでした。

旅に出る日は「かか」の入院日でもありました。翌日は「かか」の子宮摘出手術日、その日の熊野は冬の雷鳴とどろく荒天のさなかでした。裏アカウントで、偽りをつぶやき続けるうーちゃんの、ぎりぎりの心の叫びが、圧巻の描写で続きます。激しい雨のなか、もつれる脚で、信仰の地「那智曼荼羅のみち」をひたすら歩むうーちゃん。空が雷で強烈に光った時、うーちゃんは「かか」を妊娠したと思いました。「かかあ」と、「かか」を呼びながら、泣き叫ぶうーちゃんの心に、いつしか、あのどうしようもない家への懐かしさが浮かんできたのです。

「自分が女であり、はらまされて産むことを決めつけられる得体の知れない性別であることが、がまんならない」など、主人公19歳の感性が生みだす言葉が心に響き、ページを繰るたびに、新鮮な感動が湧き上がってきます。

「かか」の手術は成功でした。「けれど、うーちゃんたちを産んだ子宮はもうどこにもない」と、余韻を残して終える終章の、その余韻の向こうに新たな希望が育まれることを願いつつ、ページを閉じました。ぜひ、ご一読を。(みっと)